
火の鳥 少年編

加来間沖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火の鳥 少年編

【Nコード】

N0230Y

【作者名】

加来間沖

【あらすじ】

時は20xx年。

1人の少年がある朝外に出た。すると光が空を覆った。
少年がそこで見たものとは？

人は何のために生きているのか？

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

今の人間の内、何パーセントの人間が生きる意味を分かっているだろうか？

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

20xx年…。

この物語は終わりから始まる。この世の終わりが来たのは実に2日前。

土曜日という日は部活をしていない中学生の自分にとっては、とてもうれしい日だ。今日怠けてもまた明日ダラダラできるのだ。

何の考えもなしに家から出たこの少年は山下竹一（14）で、そこら辺にある中学に通学している、普通の中学生だ。

この日はとにかく暑い。自分がナメクジなら干からびているだろうし、その前に塩分をさがし求め自害しているかもしれない。どちらにしろ屍化しているのは火を見るより明らかである。そんなことを考えていると突如、盲色になるんじゃないだろうかと思うほどの光が空を覆った。周りのものが分子レベルで破壊される様な錯覚に陥っている。目が回る。体が溶けていく…。

ドツ…鈍い音がした。頭を金属バットでぶん殴ったらこんな音がするのだろう。とにかく痛々しい音が聞こえた。自分という固体が人間の形を成していると分かったのは、体のいたるところがヒリヒリ痛んでいるからだ。

「大型トラックと衝突したのかな…」独り言をいい目を恐る恐る開いた。…何も見えない。

目を閉じてまぶたを指で擦ってみる。何かが刺さっているという感覚はなく、普通に本来の働きをしていると判断した自分は、暗いところにいる意味を説明しようと思ったが何もできないし分からない。

目の前に炎のような輝きを感じた。いや気のせいではない。それ

を鳥の姿をしていた。

「一体どうなってんだか」と呟くと「分からなくて当然よ」鳥が喋った。

まさかこれが火の鳥。話を聞いたことがある太古の昔からいて絶対に死なず、その血を飲めば永遠の命をが得られる。これがその鳥か。

「僕はどうなってんですか」「あなたは死んだのよ。でも大丈夫あなたは生き返るわ」そう言つとその鳥は暗闇の向こうへ飛んでいった。

「待つて」ハツとなつて僕は布団から起きた。「夢？」

しかしどうも変だ。ここは自分の部屋じゃない。いかにも古臭い家だ。

…体を起こすとそこには1人の男がいた。

「目が覚めたか」その男が振り向いた。それは鼻がでかく蜂に刺されたようにブツブツができていた。「どうだ気分は」そいうと男は僕に汁のような物が入った茶碗を目の前に置いた。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

どうも加来間沖と申します。

まあそのまんま原作は火の鳥です。

勝手に名作を自分風に書いてみることにしました。そんなのが嫌いな人は見ないほうがいいです。

そついうのが、おkな方は見ていただけたら幸いです。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

突如光に包まれた少年。

彼が行き着いたのはある男の家だった。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「まあ飲め」その男は俺の前においた茶碗に指を刺していった。僕が一口のんだのを見て、

「おまえさん、あそこで何をしていた。そうだ名前は？」

「僕は山下です。…」そこで言葉が詰まった。まずここがそこか分からないしこの男が何物かすら知らない。それどころかさつき光のようなものに包まれて…。ウツ。

僕はそれから先を思い出そうとした瞬間強烈な吐き気に襲われた。

「おいおい大丈夫かい」男がよってきて背中をさすった。

少し楽になったからさっきの問いの答えを述べた。「よく覚えていません」

男は少し驚いたような顔をした。まあ記憶が無いなんていったらそりゃあ驚くか。

「お前さんも政府の犠牲者が…」？何のことだ。政府が何だつて？

「理解出来なくても無理は無い。今は寝てろ」といわれたので僕は茶碗に入ってた汁を飲み干すと再び眠りに入った。なぜかとても眠かった。

…。幾時間寝ただろう。部屋は暗い。さっきの部屋に電気は無かったから部屋を移されてなかったら、僕はさっきの部屋で寝ていて夜になっていた。

「あのー」僕はいかにも寝起きですという声を出してさっきの男の人を呼んだ。そいえば名前を聞いていなかった。

数分して俺は男の人に誘導されトイレに行き再び元の部屋に戻った。男の人は”托元猿彦”（たくもとさるひこ）というらしい。たぶん僕の知識では漢字で書けないだろう。

僕は仮眠をとって朝を迎えた。

家から出てみた。家の中とは違って随分新しそうな家だ。とりあえず自分の家の近くでないことは分かった。こんなところ来たことが無い。しかし周りに立っているのは別段変わったところの無い2階建ての家で遠くにビルが見えるし、猿彦さんも日本語をしゃべっているためすくなくとも外国ということではなさそうだ。

家に戻ると猿彦さんは朝食をくれた。ご飯と昨日の汁と豆腐だ。変わった朝食だなと思いつながら礼をいい食べた。

食べ終わると昨日の話の続きが行われた。どうも分からない。「地図をみせてください」まずは場所から話すことにした。地図を見た。パット見て普通の地図だがどうもおかしい。地名が変なのだ。僕が住んでいたのは山口なのだがそこは長門と記されている。

不思議に思いつながら長門と記した場所に指をあてた。そして長門の詳細地図を見た。

やっぱり変な地名がある。だが知っている場所もある。幸い僕がいたところは同じだった。

この下関市です。

男は目を細くして「もっと細かい地図をとってこよう」というと本棚から取り出した。なぜそんなの地図があるのだろう。僕はあて

のならない地名交じりの地図で探して探しまくった。そして地形から大体の場所を割り出した。

「そこはこの付近だぞ」男はよかったなといわんばかりの頼もしい顔をした。僕は見覚えの無い風景を不思議に思ったが混乱していつて周りの建物のことを忘れてしまったのかなと思い喜んだ。

しかし、あたりに僕の家は無かった。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「お前さん本当にここ住みなんだな」「はい山口県です」「あんまり大きい声で言うなよ。政府に聞かれたら厄介だからな」

猿彦さんがさしているのは山口県とかかれていた地図だ。猿彦さんの話によると10年ほど前地名も何もかも政府の革命で変わってしまったらしい。

さらに政府は社会保障制度に支出する金額の割合を35パーセントより13パーセント減少させた。そしてやってはいけない身分制度までもつけたのだ。低いことから 民 土付属民（土民） 土 貴族 貴士 王族の6つの身分に分類した。

一番低い民とは農業をしていたり年収が低い世帯を民として扱った。土というのは軍である。2年間かけて社会保障制度の10パーセントをまわしこみ陸軍を90万より120万に増強した。また海軍、空軍、独立海軍直属陸軍（愛称：海兵隊）総員150万名それぞれを土という。そしてその土が減少したときの補佐役としてある程度の年収がある一般市民を土民という。貴族とは大会社の企業の上の部分の人たちのことで、貴士とは土を直属におく権利を持つ富豪で、王族とは大臣などの100名ほどだ。

割合をいうなら民3割2部 土民6割 土4部 貴族3部 貴士・王族1部以下という感じだ。

医療制度などの基本的なものが受けれるのは土民以上である。普通身分制度というからして一番下の「民」が少ないというイメージがあるが、3割2部の人口も医療制度が受けられなければその分の金が増える。

「民」は異常に貧しい生活をしているのだ。そう考えると3割2部とは多いと考えると不思議である。

何故このようになったかという地震で工業地帯が壊滅したためである。そのためリストラが進み「特別措置法」でこのようになったのだ。

猿彦さんはこのうちの士民にあたるようで最小限のものは受けれるそうだが、この政治に疑問を感じ敵対視さえしている。

ちなみに地名が変わったのは県などの利益がなんやかんだで猿彦さんの説明じゃあよく分からなかった。

「そしてお前は恐らく政府の犠牲者だ。いやそうだ。そうだとしか考えられない」猿彦さんは話し始めた俺がこの世界に來た理由として、リストラが進む一方で軍隊に社会保障制度の金をつぎ込まれ膨張している理由を。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

とりあえず序盤にあたるところが終了しました。
お気に入りに入れてくれた方ありがとうございます。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

すいません短いです。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

「この国は数年前まで戦争をしていたんだ」猿彦は話し出した。

「4年間続き軍がたくさん死んださ」

「勝ったんですか」気になったので聞いてみると、猿彦さんは力なく首を横に振った。「いや停戦状態なんだ。だからいつ戦争がはじめってもおかしくないって言って軍をいまだ増強してるんだ」

「そして過去から人間を送り込んできて洗脳し軍隊にする実験を行ったんだ」と遠くを見ながら、というより僕を見ないようにいった。

僕は何か気持ち悪い感覚にとらわれた。「つまり…僕がそうなんですか」「ああ…」猿彦さんが遠くを見ながら答えた。そして僕に視線を向けながら「やつら記憶を完全に消して転送し、命令を忠実にこなす軍を作っているらしい。お前もその1人になるはずだった」数歩近づいて「だがお前は記憶がある。何故だ？」そんなことを聞かれても分からない。

猿彦さんはしばらくしてまた別の地図を取り出した現在の基地だ。みると民、士民、それ以上の領域に分割されているのである。”正当なる壁”何が言いたいのかわからないが地図上にそう書かれている壁が3つの領域に分けているのである。

「これが今のこの国の制度だ。上の位のやつと下のやつは基本的に生活場所が遮断されている。」

僕はその日眠れなかった。と…言いたいような別にどうでもいいような…すぐに寝れた。

そして次の日猿彦さんと近所の人と話している。近所の人は何を話しているのかかすかに途切れ途切れで聞こえた。「もう我慢ならねえ…あの壁を…でもって…土なんかふき跳ばせ…」なにやら物騒だな。

猿彦さんは僕のところに来て「俺は明日より近所のやつらと共に土に対し反乱を起こす」…ん？「なんでですか」「殺されたんだ人が土のやつらが殺したんだ。30人も」「ささ…さんじゅうにん？ですか！」思わず大きな声を上げてしまった。

「ああもうこの声が政府に聞こえていようがかんけいねえ。土を叩きのめして、政治と戦うまでよ」

革命戦争が始めるのは明らかだったが僕には何も出来なかった。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

！
士との戦闘を宣言し、腐った政治を叩きのめす革命が今起こる！

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（前書き）

試験ダルイお。国語の漢字組ごとに問題が違って1組なのに4組のやつかいてしまったお。30点喪失フラグ。

1組の問題を見る。…やべえ全部分かる。マジ最悪。問題用紙の作り方が不順。

もうちよと大きく”これは4組用の問題ですと書いてほしかった。

そして今日70点！！俺神！！

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？

それから猿彦さんの家は慌しくなった。100人以上の人が集まった。

刹那。銃の発射音そして誰かのうめき声。

「政府だ叩きのめせ！」桑を持っていた反乱軍がその憲兵隊のような人物を叩き殺した。ボロ雑巾となった屍と思わしきものを玄関前から遠のけた。

僕はその瞬間急に目の前が暗くなったような感覚にとらわれた。

否、本当に暗くなったのだ。

俺の体は誰に操られていた。操られる？誰に？何故？答えは分からない。急に立ち上がり小走りで動き出した僕に猿彦さんは、「おい！どこにいくんだ」と声をかけるが僕は返事を返すことは出来なかった。否、話せない。

僕はどこに向かってんだ？

…幾分歩いたか。これが猿彦さんが言っていた土と土民の間の壁か…。なるほど立派だ。

門が開いた。見掛けによらず早くあいた。「過去人だなついてきな。といっても遠隔操作しているからだし丈夫だけだな」そういうと僕の体は自然にその門の中に滑り込まれるように入っていた。

僕の記憶はいったんそこで途絶えた。

「一方で猿彦さん達は「どこに行っただんだ山下!」「おーい山下」懸命に探していたがこれ以上憲兵みたいなのがきては困るため搜索を打ち切った。

「政府にやっぱり操られたんだ」「スパイをさせられていたのか!」

…こうなれば猿彦たちがとり行動はひとつだった。

「今からこの狂った世界を立て直す革命を起こすぞ!」その声に皆は鳥の鳴き声を中断させるほどけたたましい声だった。

俺はなぞの部屋にいた。まあ分かりやすく言うと牢獄を豪華にしてみたみたいなの?

ラジオ、ベット、椅子、机があった。パニックになりかけた僕はとりあえずラジオを聞いてみた。

「現在長門地方で反乱が起こっています。現在土と交戦中」と慌しい速報が耳に入ってきた。

猿彦さんたちか。

「目が覚めたなら来てもらおうか」そこには銃を持った男が立っていた。金属音と鉄格子の扉が開いた。

火の鳥Ⅱ少年編Ⅱ？（後書き）

すみません。原本が消えてしましまして。アレに全部書いていたのに。

超スロー更新ですが、どうか温かい目で見ていてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0230y/>

火の鳥 少年編

2011年11月30日19時47分発行